

石垣島に作ろうとしている自衛隊基地は「普通の駐屯地」ではない

その三 多くの人が住む小さな島にミサイル基地



2018年8月16日 FB ページに投稿

計画中の陸上自衛隊ミサイル基地は、なぜ「普通の駐屯地」ではないか？

本シリーズの「その一」では、『火種』のある場所に作る基地、「その二」では、「島を守るためだけでなく、洋上の艦隊をミサイル攻撃するための基地」をあげました。

でも、何より普通でないのは、そんな基地を、5万もの人が住み、多くの観光客がいる小さな島に置くことです。

小さな島は、ミサイル戦には全く不向きです。

確かに、島に地対艦ミサイルの基地を置けば、洋上の艦隊を攻撃できます。しかし、中国は、東シナ海沿岸に千数百基もの弾道ミサイルを配置しています。「日本が島にミサイルを配備」となれば、さらに増強するでしょう。

尖閣周辺や宮古海峡などで日中間に有事が発生して、島の地対艦ミサイルが発射態勢に入ると判断すれば、中国は遠慮なく数十～数百発の弾道ミサイルを撃ち込んでくるでしょう。有事（戦時）に軍事目標を攻撃するのは、戦時国際法で認められていますし、自国艦隊の壊滅は防がなければなりませんから。

弾道ミサイルは高速で飛び、破壊力が強く、命中精度も上がっています。多くの場合、船のような動く目標を追尾・攻撃する能力はありませんが、基地の弾薬庫や通信施設のように地上に固定された目標なら、ほぼ確実に破壊できます。しかも、配備予定の陸自の中距離地対空ミサイルは、航空機撃墜用で、弾道ミサイルを落とす能力はないので、「やられっ放し」になります。弾薬庫は大爆発を起こし、貯蔵されていた予備ミサイルは吹っ飛び、多くの通信・情報機能がマヒするでしょう。

弾道ミサイルが着弾した場合、**激しい爆風や破片**などにより、**身体へ大きな被害を受ける可能性**があります。

爆風
破片

爆風や破片などから身を守るため、状況に応じた避難行動をとることが大切です！

屋外にいる場合
[爆風や破片などを避ける]
開
近くの建物の中（できれば頑丈な建物）
または **地下へ**
もしも、近くに建物がない場合は
物陰に身を隠す
または
地面に伏せ 頭部を守る

屋内にいる場合
[爆風で割れた窓ガラスなどを避ける]
窓から離れる
または **窓がない部屋へ**

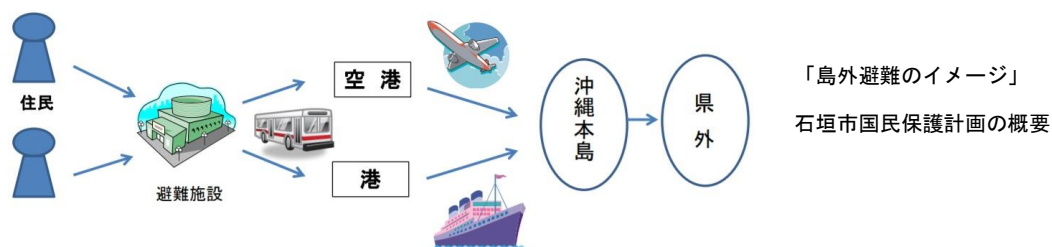
「弾道ミサイル着弾時の避難行動」
内閣官房国民保護ポータルサイト

島の各地に展開し、移動・発射を繰り返すミサイル車両も、幹線道路がミサイル攻撃でずたずたにされて自由に動けなくなれば、弾道ミサイルの集中攻撃や、動く目標でもピンポイントで追尾・命中する巡航ミサイルの餌食になります。島の狭さは、このような集中攻撃（「飽和攻撃」）には好都合です。

孤立した島では、壊れた施設、装備、人員の補修、補給、補充もままなりません。結局、島のミサイル部隊は、戦闘不能の状態になります。

相手のミサイルは、市街地や住宅にも着弾し、犠牲者が出ます。しかし、狭い島に逃げ場はありません。石垣市国民保護計画では、弾道ミサイル攻撃の際、屋内避難、堅牢な建物や地階への避難を推奨していますが、それで助かると思う人は少ないでしょう。

島外への避難のイメージ



一番確実なのは、島外に逃げることです。沖縄県の推算では、5万人の島外避難には10日間が必要です。しかも、防衛省は、有事には自衛隊が空港、港湾を利用すると言っていますから、スムーズに避難を進められる保証はありません。そうこうするうちに、空港、港湾もミサイルで破壊されれば、逃げる術がなくなります。

ミサイルの一斉攻撃を何とか生き延びたとしても、有事が続く限り、島外からの物流が途絶え、食べ物にも困る状態になります。

防衛省は、さらに、島が一旦占領されることを想定して、「奪回」する訓練を繰り返しています。そこまで行けば、島は完全な廃墟になります。

離島が戦争に弱く、武力抗戦は困難で住民に多大の犠牲を強いることは、ミサイル戦の時代になる前から、サイパン、グアム、硫黄島、沖縄、八重山の爆撃と戦争マラリアなど、無数の経験で思い知らされたことです。

ですから、本来なら、政府は、海上で武力衝突などが発生したら、それを人が住む島に波及させないように、あらゆる手立てを尽くすべきなのです。

ところが、あろうことか、於茂登岳のふもと、豊かな農業地帯で水源地でもある島のど真ん中にミサイル基地を置いて、海上有事を島の有事に直結させようというのです。とても、国民を大事にする政府がやれることではありません。

作ろうとしている基地は、島を犠牲に相手軍の撃破を図る無謀な前線基地です。専守防衛の「普通の駐屯地」ではありません。